
僕は龍であなたは姫様？

伊藤勇作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は龍であなたは姫様？

【Z-ONE】

Z6083C

【作者名】

伊藤勇作

【あらすじ】

月を見てしまつと龍になる僕、明星翔は幼なじみの宝条伊織が異世界の人であることを告白される。そしてその世界へと一緒に行く事になった僕と伊織だが・・・そこは魔法が常識として存在する世界だった。異世界学園ラブコメディー・・・のはず（作者談）。【ただ今改正中！本編はしばしまたれよ！ってか待っていてください！すみません！】

プロローグ（前書き）

色々といつて迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします。

プロローグ

僕の名前は、**明星 翔**
みょうじょう うかげる

中学3年。成績は中の上ぐらいだ。

身長は168cmとまあ普通、付け加えるなら痩せ方。
見た目は……人によつてはカツコイイと言つてくれる。
目の色が紅色をしているのが特徴だ。

だがこれは問題ない。

僕の体質に問題があるのだ。

それは満月の夜になると……

龍になつてしまつのだ。

普通は満月の夜だと、オオカミになるつて思つけど、僕は何故か龍になつてしまつのだ。

よくわからないうが、稀に違つた体質の子が生まれるらしい。
因みに、父さんは素直にオオカミで。

母さんは……変身しない。

なぜかと言つと、この变身体質は男の人にしか現れないらしい。

ところで昔、僕はなんで龍になるのかと両親に聞いたら。

「お前には曾祖父さんの血が強く流れているんだよ」

と答えてくれた。

僕の曾お爺さん。

別名『破壊の化身』

その曾お爺さんの逆鱗に触れば最後、生きている人はいない……

とまで言われた伝説の人である。

僕が2歳の頃、世界旅行に行つたらしいが……よくは分からぬ。

そのお祖父さんは僕と同じ龍になるらしいが僕とは少し違うらしい。

曾お祖父さんは、黄色い瞳に、青い鱗に道が短く、翼が大きくてよくRPGに出てきそうな西洋竜。

逆に僕の場合は、深紅の瞳に、赤い鱗、蛇のような体に、大きな顎をした翼と

手がくつついた感じ、近い感じではなく中国に描かれている龍に翼に手がついた感じである。

だがこの体质は一般の人には「結婚する人」以外には見せてはいけないらしい。

もし見られたら何処か遠い所へ引っ越す事になる。

それは僕は嫌だ。

何せこの、アオイ町で生まれて早くも16年、この町に愛着はある。この町の人は少し血の気が多いが、とってもいい人ばかりである。それに、馴染みのある友達の人とも別れるのは辛い。

辛いのだが……

今、正に引っ越しの騒ぎではなく……
異世界へ行こうとしてます。

それも明後日！－！

それは幼なじみの、宝条 伊織
が原因だった。

第一話 幼なじみは異世界の人？（前書き）

第一話 幼なじみは異世界の人？

そは昨日の放課後のことであつた。

僕は早く帰つていつも通りに宿題をしようと思つた。
が……

「翔！ 伊織さんが来てるわよ」

「分かつた。今行く」

まだ出していない宿題を素早く出して、伊織の居る玄関へと向かつた。

「珍しいね。伊織が僕の家に来るなんて…… 何か用事？」

そう普通に聞く僕だつたが。

「ねえ、翔君」

いきなり詰め寄つてきた。

「な、なに？」

顔が赤くなる僕。そりや僕だつて思春期なんだからいきなり近づくとドキドキする。

それに伊織つて学校でも人気あるからな……
スタイル良いし、かなり綺麗だし、性格だつていいし……
などと色々考えていたら。

「…………」いやあ話せないから、公園に行こう

そんな彼女はいつもと雰囲気が違つた事に気付いた。

「…………分かった」

何がある。 そう思つて何も言わずに僕は付いて行つた。

そしてしばらくして近くの公園に着いた。

もう午後8時、公園には人は居ない。

そして月の光だけが僕等を写している。

そしてその月き当たりに写る彼女はとても幻想的だった。

儂く、脆く、ふれてしまえば消えてしまいそうな

そんな雰囲気だった。

そんな雰囲気の彼女をしばらく見てた。

そして彼女は急に口を開いた。

「…………転校するんだ」

「えっ？」

一瞬なにを言つたか分からなかつた。

「遠い所に……転校するの……」

もう最後の所は耳に入つていなかつた。

なんで……？ どうして……？

そんな疑問ばかり浮かんでくる。

「…………『めんね…………』

伊織は最後にそう言つた。

「…………なんで？」

「なんで謝るの？
そう言いたかつた。
だけど言えない。
何故か言えない。
今の彼女を見ると……
そんな風には言えない。

「…………」

「…………せ、せめてさ！何処に行くのか教えて？」

今僕にはそれが精一杯だつた。

「…………」

彼女はしばらく空を見ながら答えた。

「…………私ね…………実はこの世界の人じゃないの…………」

「…………は？」

「私は昔、とある異世界から飛ばされて此処にやつた来たの…………」

「…………」

「だからね、元居た世界へ帰るんだって……」

……それが彼女の答えだつた。冗談を言つて居る田じやない事は明らかだつた。

「それでね。明後日帰るから挨拶はしておいたと思つたの……」

「…………なんだ」

「本当は……ね……分かれたくない……けど、仕方が……無いの」
もう最後あたりは声が小さく、涙声で何を言つてているのか分からなかつた。

僕はどういえば……

「ふつふつふつふつふ」

……そんな雰囲気をぶち壊す不気味な声が何処からともなくした。
嫌な予感……

「全て話しあは聞いた……」

家の両親うちだった。

「つてか、いつのまに……？」

そんな僕のツッコミにも気にもせぬ。

「翔……貴様も男だつたらもつと話すべき事があるだらうが……」

「そうですーー優しく抱き寄せるとか……キスするとか……」

それって、もの凄い恥ずかしいことばかりじゃないかーー！
しかも伊織も真っ赤になつてゐるし。

「そつ、そんなこと……」

「言ひ訳、無用だーー！」

「へへ……」

そんな一言で黙らされた僕。
僕って弱いな……けど。

「父さん、母さん。これは僕と伊織の問題だ。口を挟まないでくれ

その反論に父さんは。

「ほつ……良い度胸だな翔」

メチャ怒つてゐる……

これつて怒られることなの？

「なら、男は黙つて拳で語れーー！」

いきなり間合いを詰めてきた。

「つおいーー？」

父の拳をギリギリかわす僕

「甘いわー！」

そして今度は膝が顎をねりつてきた。

「くつ……」

これも回避成功

だが、そんな順調な行動をあざ笑うかのよひに渾身の一撃を受けた。
後ろから……何故だ？

「えへっ

母さんだった。

不意打ちだろ……それ。

そう思いながら僕は倒れた。

薄れゆく意識の中で、伊織だけが心配そうに僕の名前を呼んでいた。

第一話 まあ、人生色々と（前書き）

第一話 まあ、人生色々と

そこはとても気持ちよかつた。

不思議な感覚。

ずっとここに居たいような……そんな感覚。
だけどそんな訳にはいかなかつた。

「…………んあつ……」

妙に艶めかしい声がしたからだ。

あれ？ そう言えば僕何処に居るんだ？

少し目を開けてみると……

なんと田の前に伊織の顔があつた。

「…………あれえ？」

頭の中が真つ白になつた。

え？ なんで？

目の前にある伊織の顔はめっちゃくつちゃく可愛かつた。

……つてそうじゃない！！

これはヤバイ！…とてつもなくヤバイ！！

どうにか顔を逸らそうとするが。

「んつ……」

伊織の腕が僕の首に巻き付いてきた。

つて、動けない！？

しかも顔がさらに近づいてくる…？

ヤバイ！…ヤバイ！…ヤバイ！…

このままでは僕の理性が持たない…！

どうにかして脱出を…！

そう思つて逃げようとするが

「か、からだが動かない！？」

所詮男の子。脳と体がリンクしていくとは限らない。
すこしは冷静になれ僕。

そう、まずは周りを見て状況判断…！

何故か一緒に寝てる伊織。

そして昨日殴られた頭が痛い。

そして…何処？

知らない部屋だぞ。

…僕の部屋じゃない事は確かだ。

だが、そんな事態から一気にやばい方向に行つた。

「もう起きた？」

誰かの声がした。

「じゃあ、見て来るよ

もう一人の方が返事をした。
見てくるって……まさか…？

「オーラ、入るぞ」

やばい！？この状況は見られたら……

だが、時すでに遅し。

גנרטור

.....

つい目があつてしまつた。

「……いや～『めんね。お楽しみだつたね』」

「いやいや！？違いますー！」

全否定します。これは事故です！

「まあ、そん時まじかんと…………な？」

「何が！？」

「まあ、それほん後にしても、起きたら起きたでいいやん。

「だったらこの状態をどうにかしてください」

本当に助けてください。

「自分でどうにかしろ」

にやにや笑いながら座つた。

「そんな他人事のよつこ……」

つて、そつ言えれば貴女は誰ですか?
よく考えたら見たことのない人だ。

「ん? どうした?」

不思議そうにこつちを覗いてきた。

「あの……あなたは誰ですか?」

今さらだが、一応聞いておいた方がよさそうだ。

「ん? 私か? 私は宝条 志穂。こいつの姉さ」

……知らないぞ、そんなこと。

「まあ、私は別の所に住んでるからな」

「はあ…… そうですか」

まあ、よく見たら確かに似てるかも……

しかし美人だな……

顔立ちも綺麗だし。

姉妹そろつて美人揃いとは……

……て、そうじゃない!

今の状況をどうにかしないと……

しばらくしても進まなかつたため、志穂さんに助けられてどうとか
脱出した。

だがそんな中でもずっと寝ている伊織もある意味すごい。

第二話 ここのところな事に? (前編)

第三話 いつの間にこんな事に？

「世界とは違うもう一つの世界。」

それは最も近い物でもあります……

最も遠い物でもあります……

遙か近く、遠い世界。

「で、明日行くわけだけど……準備は出来たか？」

いきなりで解らない人もいるだろうから一応説明しておく。
この人は宝条志穂、伊織の姉である。

僕も知らなかつたが、この人は今まで別の所にいたらしい。
その志穂さんが、意氣揚々と言つた。

どうやらこの人も行くらしい。

後で訳を聞いたら『面白そうだから……』だそつだ。
まあそれはいい。どうせ僕には関係のない話だから……そつ、関係
のない話だつたのだが……

「勿論、翔もだよ？」

志穂さんの口から有り得ないことを聞いた。

「……は？」

今、なんとおっしゃいましたか？

「君カケルも行くんだよ」

もう一度言つてくれた。

「翔君も一緒に行くんだね」

いやいや伊織なんでそんなに嬉しそうなの？
それより……

「なんで僕まで行かないといけないんですか？」

伊織達は自分達の世界へ帰らないといけないのは分かる。
だが、僕が行かないといけない理由なんて何処にもない。

「翔の両親が『ついてだから連れて行け』って言つたからだ

……あの親は何を考えて生きてるのだ？
有り得ないだろそれ。

「……一端、家へ帰つて良いですか？」

「いいよ。まあ無駄だけどね」

何かムツときたけど此処は大人しく我慢。この怒りはあの両親（馬鹿親）へぶつけるのだから……

「じゃあ、行つて来ます」

そう言つて立ち上がつて出でていった。

「……お姉ちゃん、翔君行つちゃつたよ」

心配そうに見ていた伊織が、彼の出ていって方を見ながら言つた。

「な～に、すぐ戻つてくれるや」

何かを知つてゐるような言い方だつたが、こゝ言つた時の姉がその事について教えてくれないのは伊織も知つていたのでそれ以上は聞かなかつた。

その頃、明星翔はとこうと……

家には着いた。

着いたのだが……

「……嘘だろ？」

自分の家が空き家になつていた。

「……何故？」

本当になんでこんな事に……

そう思いながら玄関付近まで近づいて行くと。

「ん？」

何か白い紙が挟まっていた。

……とりあえず、行つて見てみる事に。

「……何これ？」

最初はよく解らなかつた。

だつて此処に書かれているのは。

僕が伊織の婚約者扱いになつてゐるのだ。
しかも結婚前提で……

「な？あ？はあい？」

もはや言葉にならない。

「う、うそ？なんでこんな事に……」

僕は同意してないはず……
そう同意してないんだ。
落ち着け。落ち着け、僕。
これは無効なはず……
そう思つてよく見てみたら……

親同士の同意で決まつていた。

「……」

初めて殺意をいだいたよ。

許嫁を通り越して婚約かよ……しかも結婚前提つて……

有り得ないよ……本当に……何考えて生きてるんだ？本当に……
だが此処にいても何の解決にもならない。
とりあえず、伊織の家に帰ることにした僕だった。

～しばらくして～

「おひ、帰つてきたな」

そう言つて僕を家に入れた。

「……あの、これ一体どうこう」とですか？」

やつまつてこの紙を見せた。

「ん？これが？」

その紙を見た志穂さんは……

「わはははははははははは……」

笑つた。

「これは笑い」とじやないですよ……。」

本当に勘弁してやだわ。

「いやいや……これは初めて知つたよ」

「……」

つて事は他に何を知ってるんですか？

「私が聞いたのは、翔の両親は海外旅行に行つたってことだけ聞いたから……」

「ああ、成る程……」

その間、僕が家に帰らないように家を売つたわけか……

「なんだか新手の嫌がらせみたいだな」

しかも勝手に海外に行つてゐし
もうビビりでも良くなつたよ

「でもこれじゃあ、私は翔のお義姉さんになつちやうわけだ」

何か嬉しそうに言つ志穂さん。
そして何を思ついたのか

「ちょっと待つて」

そう言つて奥に行つた。

「……」

ものすごく嫌な予感がするのは何故だろう。
そう思つた時

「翔君……」

伊織が顔を真っ赤にしながらひつけに来た。

「あっ、あの……」

「どうかした？」

「ふつ、不束者ですが……よろしくお願ひします」

もう一回以上に無いくらい真っ赤になつて言つた。

「え？……な、なにが！？」

「……まさかー？」

「伊織にあれ見せたんですか！？」

「いや～別にいいでしょ！」

「いや、良くなじよー！」

「え～なにが？伊織が嫌なわけ？」

志穂さんが、伊織に聞こえるぐらい大声でやつ言つてしまつたため

「え？そつ、そつなんですか？」

なんだか、今にも泣きやうな伊織

「こつ、いや、僕は別に伊織が嫌じゃ無くて……」

必至に説得する僕。

「じゃあ、何がいけないんですか？」

涙目になつた伊織が顔を近づけてくる。

……ヤバ、メッチャ可愛い。

僕は顔を真つ赤にしながら

「えつ、えと……別にいけなくも無いよ……ね……」

まつすぐ伊織を見られないよ……
だが、それを勘違いして

「私の顔が見れない……って事は嫌なんだ……」

もう限界まで来た涙がまさに零れそつた感じだ。

「えー…ちつ、ちがつよーーー！」

かなり焦る

その様子を見ている志穂さんとは言ひつと……

「いやー修羅場だね翔」

思いつきり楽しそうに見ていた。

……誰のおかげだと思ってるんですか？

そんなこんなで、結局、伊織を説得するのに一時間は掛かってしまった。

そのときの僕はとても可愛く面白かったらしい。
と、後に語る志穂さんだった。

第四話 始めつけじなむの（前書き）

第四話 始まりは「」となるもの

「…………」

周りを見る限り森だ。
何処をどう見ても木しかない。
しかも僕一人だけ。

「…………おーー」

やがて周りを見るがさつきと変わらない。

「…………え、何でこんな事に？」

本当にどうなったかといつと今から数時間前である。

* 数時間前・宝条家にて*

「じゃあ、行ぞ準備は大丈夫か！？」

相変わらずテンションが高い宝条志穂さん。
まあ、いつもそうだが、今日はいつもとは違つてかなり高すぎるので
らしい。

「まあ、大丈夫じゃないかな……多分」

僕がそう答えると。

「あまい……その考え方間違っているぞ……？」

何故か怒られた。

「おっ、お姉ちゃん……ちょっと落ち着いてよ。子供じゃないんだから」

伊織が志穂さんをなだめる。

いつもと立場が逆だな。

「めんぼくない……」

怒られたせいかいの感じに戻ったが、雰囲気は相変わらずだ。
なんかちょっと心配だが、まあ、これは仕方がない。
僕も少しづくわくしているからな。

「で？僕等が行く所は大丈夫なんですか？」

いきなり行つた場所が紛争地帯とかだったら災厄だからね……。
「ああ、その心配はない」

そう断言する志穂さん。

何故そう断言できるんですか？

「ふつふつふ~」

不敵に笑う志穂さん。

「その訳はだな……」

「…………その訳は？」

「…………女の感だ」

「…………」

「…………そうですか。

僕。行くの辞めてもいいですか？」

「まあ、今のは[冗談だ]

「…………しようつね」

「…………なかつたら僕は行きたくないですよ。

「まあ、実は因果の関係や因果の性によつてあつちの世界と連絡が取れるんだ。だからもうこいつちからあつちの知り合いに連絡済みつて訳……！」

嬉しそうに説明する志穂さん。

「…………つて。

「因果の関係つてなんですか？」

なんか僕にはよく解らない単語が出てきたぞ。

「まあ説明すると因果の関係っていつのは、直接的原因（因）と間接的原因（縁）との組み合わせによって様々な結果（果）を生起する事で、つまりその空間から始まつ……（以下略）」

「すみません。もつと解らなくなりました。」

「そんな僕を見て伊織が解りやすく教えてくれた。」

「つまりね、一つ以上の存在の間に、原因および結果として結びついた関係のことだよ」

成る程。

さすが伊織だ。志穂さんより解りやすい。

「簡単に言えば、偶然にも一つの関係が一つに結びついたってこと？」

「正解。まあ、そんな感じでいつの世界を（—）あいつの世界を（×）で表すと、私達が行き来したせいで（—）世界と（×）世界に結び付きが出来たってこと、そのおかげで連絡がとれるってわけ。そして……（また解らなくなるので以下略）」

なんかややこしいな。

「そんな訳であいつの世界と連絡してから大丈夫……」

よい笑顔で言つ志穂さん。

……まあ先程よりは解つたし、大丈夫なりよしじよつ。

「それなら行きましょうか」

僕がそう言つたと同時に。

「じゃあ早く！今すぐ！…素早く行きましょう！…！」

そう言つて、テンションが異様に高い志穂さんが一人走つて行つた。

「まつ、まつてよお姉ちゃん」

その姉を追いかける伊織。

「……………せっぱり心配だな

そうつくづく思つ僕だった。

が、当に不幸なのはこの後のあとでの出来事だった。

第四話 始まりは「」となるもの（後書き）

第五話 人生なんてこんなもん（前書き）

感想と評価をしていただき誠にありがとうございます。
これからも、よろしくお願いします。

第五話 人生なんてこんなもん

場所は宝条家地下

そこには一つ大きな扉があった

そこが異世界との繋がりを持つ場所

唯一の別の世界への扉

その扉にはよく解らない文字や言葉で書かれた魔法円が書かれていた

それはとても不思議な光景だった

「…………じゃあ、行くけど一つ注意がある」

先程とは打って変わったように真面目になる志穂さん。

「このゲートはあっちの世界に繋がっているの……但し一方通行の扉だけね」

静かな地下に一人志穂さん声が響く。

……なんか緊張するな。

そう思つて伊織を見ると、同じように緊張していた。

「……どちらの世界とあっちの世界は殆どが同じ……つまりこの世界

となんら変わらない。いつもとも過ぎじやない……ただ一つの「」を除いては……」

「あつー……わうだつた……」

何故か声を上げた伊織。

「ん? なにが?」

「「」わ、「」めん。なんでも……」

やつ言つて下を向いてしまつた。

……なんだつた?

そつ思つたが、志穂さんの話が始まつたので、そつちに集中する。

「「」わの世界では主に科学……まあ簡単に言えれば実証可能な知識つてこと、それがこの世界では中心なのは……」

そしてひょつと言葉がとぎれる。

「……」

そして何故か黙つた。

「……」

とても静かになつた。

「……」

……静かすぎる。

「…………」

その静かさに緊張する僕。

「…………」

それでも黙っている志穂さん。

つてこくらなんでも静かすぎだろ。

「…………じゃあ、あっちの世界では何なのですか？」

さすがにこの緊張に絶えられなくなつて質問する僕。
その僕の質問にちょっと困ったような顔をした。

「えー?まあ、なんて言つか、あっちでも科学はあるんだけど……そ
の、あっちの世界……まあ異世界のことね、そっちでは主に魔法が
主流なの……」

「…………はい?」

今なんか魔法つて聞こえたよつな。

「あっちの世界は科学技術よりも魔法……つまり魔術が盛んなの」

「…………本当なんですか?」

思わず声に出てしまつた。

「本当のことよ」

俄かには信じられないな。
にわ

そんな反応を見てか志穂さんか付け加える。

「その……伊織には言つたんだけど、まだ翔には言つてなかつたの
よねえ……」

「成る程、だからさつさ伊織が反応したのか。
そんな納得をする僕を見て、伊織が話しかけてきた。

「……あつちの世界じゃね。貴族の人には近い人が政治をするんだよ

「じゃあ、王様とかいるの？」

「うーん、いるみたいだけど……王には実権は殆どないよ。日本で
言つ天皇に近い感じ……つてお姉ちゃんから聞いたけど……」

「はあ、成る程ね」

それにもしても魔法か
本当に大丈夫か？

そんな心配をよそに話し始める志穂さん。

「ま、そんなこんなで一応前置きは終わり。次に行き方の説明ね」

そう言つてあのでかい扉の前に立つた

「ほり、あんた達もこいつらに……」

僕等を呼ぶ。

「いい? 今から行くけどこれを持つてて

そう言って渡されたのは……なんだこれは?
それは小さなビー玉のような物だった。但し黒い。

「……お姉ちゃん。これなに?」

「これは発信器みたいな物だ」

……何故にそんな物を?

「もしさぐれてた時のためよ

どうこうこと?

「「」のゲートで移動すれば間違いなくあっちの世界に行く。けど、人によつては移動する場所に誤差が出るの、同じ場所に皆行くかもしないけど、一人だけ離れてたり……」

「……その誤差つてどれくらいですか?」

「人によつて変わること、平均一kmぐらいかな?」

そう答える志穂さん。

成る程、そのための発信器か。

「まあ、これは万が一の可能性だから多分、大丈夫」

笑顔で答える。

……なんか心配だな。

「……」

そんな中、僕と同じように心配している伊織が居る。

「大丈夫だよ。伊織」

そう僕が問いかける。

「……でも」

心配そうに僕を見る。

「まあ、志穂さんがああ言つてることだし。それではぐれたら、よ
つほど運が悪いんだよ」

笑いながら僕がそう言つたら。

「……そうだよね」

そう言つて伊織も笑つた。

「お~い、そこの君達。行くぞ~」

そう言つて僕たち三人は扉に入つていった。
光に包まれ、次に見えたときは……

そして前回の冒流に続く

「……」

まさかその運が悪い方に入るとは思つたても居なかつたよ。

「はあ～……ついてないな……」

寂しく一人、森に立つてゐる僕。

……とつても虚しい。

その後、何時間か経過してようやく迎えが来た。

その時は既に夜であつた事は言つまでもない。

もつこりんなのはこりこりだなとつくづく思う僕だった。

第六話 いつ書いた時だけ仕事が速い人

ある意味、話は唐突だった。

それはここに来て三日後の日のことでした。

僕等はいま、この異世界で伊織が住んでいたと言つ家にいる。

まあ、ここに来てもう三日も経っているのだから少しは慣れてきた
ここに来る前に魔法がどうとか言つていたがあまり気にはならなか
つた

まあ、僕の存在自体が、ある意味非現実的だからなのかもしれない
が、

僕が思つていたよりはそうではなかつた

……だが、後々その考えは間違いだったと気付くにはもう少し時
間が経つてからであつた

その布石がまず志穂さんの一言だつた

「君達、明日から学校だからよろしく」

いきなりそんな事を言う志穂さん

伊織は買い物に出かけているため、今僕しか此処にはいない。

「ん? 理解できなかつたかな?」

いや、理解は出来ますけど……何故にそんな事を?

「いや~だつてさ、君らまだ学生でしょ?」

「確かにそうですけど」

「なら明日から学校ね」

有無を言わせない感じだ。

まあ、確かに僕や伊織はまだ学生だから学校に行くには問題ない……が、問題はその後だつた。

「因みに、翔君と伊織は魔法課の方に入つてもうつからね

「…………は？」

いま言つた事が一瞬分からなかつた。

「なんだか今、魔法課つて聞こえたような気がしましたけど？」

「ん？ そうだけど？」

何事もなかつたかのよつと言つ。

「いやいや、何故にそつなるんですか？」

そんな質問にやれやれと言つた表情をする。
……なんだか腹が立つなその表情。

「それはまず第1、伊織は元々この世界の住人だから魔法が使えないと不味いでしょ？」

「まづいのかはどつか知りませんけど、本人から許可は取つたんですか？」

「そちら辺は抜かりなし、もう取つてあります

なんだかこの人は嬉しそうだな。
まあそれは別として。

「なんで僕も何ですか？」

そこいら辺が分からぬ。

伊織は先程説明した理由でいいとして、何故に僕が？

「そんなの決まってるじゃない！…！」

驚いたよつとしてから。

「その方が面白いからに決まってるからよ…！」

断言した。

明らかに面白いと断言した。

それに僕の意見は明らかに聞いてないし。

「ん？不満そうね」

「そうですよ、なんで伊織には聞いたのに僕には聞かなかつたので
すか？」

「聞いたら承諾するっ！」

「しません

「だからよ」

「は？」

意味が解らない。

「言つても翔君が承諾しないから勝手にきめた」

「こらこら。」

それじゃ横暴だぞ。

それに僕は納得してないし。

「あ、もう無駄だから」

「は？ なんで？」

「もう魔法課で申請したから変更は不可能」

その一言で結局、僕は魔法課の方に行くことになってしまった。
それがこれから人生を左右するだなんてこの時の僕は思っていなか
つた。

第七話 忘れていた事実？（前書き）

お久しぶりです。

今回から、また書いていきます。

宜しく願います。

第七話 忘れていた事実？

それは今日の午後に起きた出来事だった。

「さあ少年！少女よ！明日を乗り切るために、必要なのはなんだと
思うか？」

いきなり大声、かつ意味不明なことを言い出す志穂さん。
つーか、唐突過ぎて話についていけない。

「…………お姉ちゃん一体どうしたの？」

先程、買い物から帰ってきた伊織。
どうやら姉の対応に困っているみたいだ。

「ふつ、私はね今気づいたのよ！」

「いつも人生を爆走している事にですか？」

「…………それははどういう意味？」

沂い顔をしながら、僕に聞いてきた。

「言葉の儘の意味ですけど？」

「…………

しばりへ固まつたまま。

「あはははは！細かい事は気にするなー。」

笑いながら誤魔化した。

つてか、やっぱ自覚はしてたんですね。

「そんな事よりも、他に重要な事があるでしょうがーー。」

話題を戻すように、先程よりも大きな声で言つた。

「それは……」

「「それは？」」

少し間を空けてから……

「なんとー私はすっかり忘れていたのよーー。」

話がわからない。

いや、正確には、何が言いたいのかが理解できん。

「お姉ちゃん。もう少し分かるように言わないと……」

呆れながら、伊織も言つ。

やはり伊織も理解できなかつたか。

「ならば簡単に説明しようーー。」

のりのりのテンションで言つ。

最初からそうしろ。

「実は、明日からの学校の事だけビ……」

それの何処に問題が？

「教材とか必要な魔道具とか……買いに行くのをすっかり忘れてて」

「……」

「何となく落ちが分かつて氣た。

「だから、今から買出しに行かないと間に合わないのよね～」

笑いながら重要な事を言つ。

「おこー?..」

「何で重要な事を忘れてるんだよーーー！」

「お姉ちひさんー?..」

伊織もかなり驚いている。

「と云つて、今から行くぞーーー！」

玄関に直行して行く志穂さん。

「じゃあ、僕らは夕飯の支度でもするか

先程、伊織が買つてきた材料を見ながら言つ。

「そりだね。お姉ちゃん、なるべく早く帰つて来てね」

伊織は僕を手伝おうと一緒に準備する。

「つておーーー? 私だけ? 私だけのけものーーー?」

早々と玄関からこつちに戻つてきた。

「いや、当然でしょ?」

「やうだよ。もとあと言えばお姉ちゃんが悪いんだから」

伊織もこひらの味方につくる。

……が。

「ふつ、といろがじつこ。君達が来ないと話しならなーいのだ

強気で語る。

「何故ならー教材云々はともかく『魔道具』はその人にあつた物で
ない使えないからだーーー!」

さらりと重大発言。

「……」

伊織は呆れて、僕は……

「なんでそんな重要な事を忘れてたんだよ」

「まあ、いつもの色々とあるのよね～」

何だかんだいって謀魔化した。

「…………それに最近、姫様がなにかといふゆえこれから」

小さな声で何か囁つ志穂さん。

「ん?なんか言つたか?」

「いや、なーんこも」

笑顔でそつ答えて。

「では随行いつかー?」

「じゃ、今日の夕食は志穂さんの奢つね」

「…………え?」

「やうだね、お姉ちゃんが悪いんだから、それくらいにしてね

嬉しそうに伊織が言ひ。

「ちよひとー、それは…………?」

「「いい訳は無い」」

第八話 買出しの時には気をつけよつ（前書き）

感想と評価をしてくださつた方。
どうもありがとうございます。

第八話 買出しの時には気をつけよつ

この異世界。通称『Mirror the Universe』と言つらしい。

まあそんな事はどうだつて良い。（いや、本当は良くないが）今大事なのは、明日の為に必要な教材と魔道具である。そこで、この町で一番大きい大通りに来ていた。

教科書や魔道具を買いに来たのは良いのだが……

「まさか逸れるとはな……」

また一人になるとは思つてもいなかつた。

「さて、どうするべきか」

周りを見てみると人・人・人・・・・人が多すぎるわ。こういつた時は動かずに待つていた方が良いのかもしけないが、何せ人が多すぎる。

はつきり言つて、僕は通行の邪魔にしかならない。

「どこかの店に退避でもするか」

あたりを見渡して……

「おつ」

古びた店を発見。

何か雰囲気的に気に入つたので、近づいてみる事に……

「…………うわあ」

近づいて見た感想。
思っていたよりも…ボロい。
今にも崩れそうで、軽く蹴つただけでも壊れてしまいそうな店だった。

「一体何の店だ？」

看板らしい物がない。
まあここら辺に立っていると書つた事は、少なくも『魔法』に関する店なんだろうけど……

「これはずだつて廃墟だよなあ

見た感じの感想を述べたら。

「……は廃墟じゃないよ」

隣からそう聞こえた。

「え？ そうなの？」

思わず聞き返した。

「もうだよ。……歴れきした『魔道具』の店だよ

「やうなのか」

素直に驚いた。

こういった店は、見た目で判断していけないものだな、と思いながら。

新たな疑問が出てきた。
はて？僕は一体誰と喋ってるのだろうか？

「ん？どうかした？」

喋っている方を見てみると……女の子だった。
身長は僕よりほんの少し低く。（160cmぐらい？）
見た目は僕と同じか、年下に見える。
髪型はショートカットで色は赤みがかつた黄色。
瞳の色は橙色。

活発そうなイメージの……美少女だ。

「おーい、聞いてる？」

「え？あー？」

いつの間にか、彼女の顔が目の前にあった。

吃驚して、思いっきり後ろに下がつたら…転んだ。

「大丈夫！？」

その子は僕の反応に驚いたみたいだ。

「……大丈夫だよ」

少し痛かっただけど。

「せうっ…なりいいけど」

そう言って僕が立ち上がるのを待つて。

「ねえ？名前、聞いていい？」

嬉しそうに聞いてきた。

「いいよ。僕の名前は『明星 翔』」

「明星 翔」

僕の名前を聞いたら……なぜか悩んでしまった。
そしてしばらくしてから。

「…………ねえ、翔って読んでいい？」

真面目な顔をしながら聞いてきた。

「いいよ

あつわりと僕が承諾したら。

「えー…いいの…？」

何故だか知らないけど、驚いたみたいだ。
一体何処に驚くような要素があつたかな？

「あ、『めん！』気にしないで良じよ

照れ隠しをするように誤魔化した。

「私の名前は……」

といいかけた所で急に止まった。

「…………どうしたの？」

「いや……ねえ……」

その子は少し悩みながら
小さこ声で『いいけど……うーん……もし……したら』と独り言
をぶつけて言いながら。

「ま、いいか」

と一人でなつとくして。

「私の名前は『リン・クレンジョン』だよ。よへじへね

そう彼女は名乗った。

第八話 買出しの時には気をつけよう（後書き）

感想、評価、又はその他。
・・・まあ色々とそちら辺を含めて、出来たらようしきくお願ひします。

第九話　「これからが始まり？」（前書き）

あと一・二話ぐらい」こんな風に続いていきます。

その後は学園編です。

感想と評価出来ればお願ひします。

第九話　「これからが始まり？」

実は現在進行形で迷子になつている僕だが、いつの間にかリンと一緒に、あの古びた廃墟（正確には魔道具専門店）に入る事になつていた。

「そう言えば翔つて学校はどう?」

扉を開けながら、リンが聞いてきた。

「うーん……わからない」

そう言えば『学校に行く事になつている』とは聞いたが、何処の学校かまでは聞いていなかつたな。

「分からぬいの?」

「うん。今年から入学するのは確かだけどね」

「あ、じゃあ私と同じだね」

嬉しそうに言つぽん。

「つて事は、翔は魔道具を買いに来たの?」

「うん、そうだよ」

だけど途中で笛と逸れちゃつた

とは言えない。恥ずかしくて言える訳がない。

「じゃあ、この店で正解だよ」

「え？ 正解？」

なにが正解なんだ。

「ここは主に魔道具を扱う店だからね」

「へ～ そりゃなんだ…」

たまたま見つけた店が専門店だったとは……運が良いのか？ 悪いのか？

「いらっしゃい」

奥の方に入つて行くと一人の女性が立つていた。
髪は金色、瞳は青く、人目見ただけで美人な人だと分かる。

「」用件は？

「魔道具申請に」

「分かりました。ではいらっしゃく」

そう言って案内される。

「ねえ」

僕が小声でリンに聞く。

「なに？」

「『魔道具申請』ってどういづいと？」

僕がそう聞いたらリンは軽く驚きながらも答えてくれた。

「『魔道具申請』って言つのはね、自分にあつた魔道具を作つても
らえるのよ」

「作る？」

「そつ、魔道具は個人によつて様々な種類。属性。形があるの」

「ふむふむ」

「それを作る儀式みたいなのが『魔道具申請』って言つの」

「そつなのか……なんか初めて魔法の事を知つたな。

「因みに、ここで申請した魔道具は、個人登録されて、犯罪防止にも役立てるのよ」

「為るほど……なかなか複雑と言つか、分かり易いといづい」

そんな話をしていたら、先程案内してくれた女性の人かクスクス笑
いながら。

「お一人様はもしかして恋人同士ですか？」

などと聞いてきた。

確かに今の会話を聞いていたら、そんな風には見えなくもないけど・
・・・それは勘違いですよ。

「い、いえ……その、私たち、まだそんな関係じゃーっ。」

頬を赤くしながら否定するリン。

「あらら、残念」

そう言って。

「でも『まだ』なんでしょう？じゃあ頑張ってね」

「でもやら勘違いされて、リンは応援された。

そしてまた前方を見ながら女性は案内を続けた。

「うーーー絶対あれは誤解したままだよ……」

顔を赤くしたまま恥ずかしそうに俯くリン。

けど、その割りに微妙に嬉しそうに見えるのは何故だらう？

「まあ気にする事は無いと思つけど」

僕がそう言って慰めた。

「……」

なぜか不満そうな顔をした。

そんな会話がありつつも、目的地の場所に案内されたら。

見慣れた人物達がいた。

「お、アホだ！ 阿呆がいるぞー。」

そう叫ぶのは、毎度おなじみの志穂さん。

「翔君！ 一体何処に行つてたのー？」

少し怒りながらも、心配するよつに駆け寄つて来る伊織。

「あれ？ どうしてここに？」

驚いた僕。

「何言つてんだよ。あん時に私が言つてたの聞いてなかつたのか？」

「あの時？」

はて？ なにか言つてたか？

「……どうやら聞いていなかつたみたいだな」

ため息をつきつつ、教えてくれた。

「出かける前に場所を説明してただろ？ が

……………そう言えばそうだったような気がする。

「まつたぐ、しんぱ……い？」

僕に近づいて来た志穂さんが、隣を見た瞬間。固まつた。

「お？お？え？」

かなり驚いているみたいだ。

「！？ あっ！」

そして同じ用にリンも驚いていた。
二人ともお互いを見ながら、しばし呆然としている。

「……一体どうしたの？」

僕の質問がするが、一人とも答えてくれない。

「お、お姉ちゃん？」

伊織も姉の反応に少し驚いているみたいだ。

そしてそんな感じで少し時間がたつた時、志穂さんが口を開いた。

「なんで？なんで…姫さんがここに？」

「え？」

姫さん？

誰の事？

一体なにが「どういう」ことだ？

謎が謎のままだつた。

第十話 魔道具申請中（前書き）

出来れば感想、評価お願いします。

第十話 魔道具申請中

珍しい。非常に珍しい。
何故なり、明らかに困つて居る志穂さんを見るのせりが初めてだ
からだ。

「……」

ため息をつきながらも、志穂さんは喋つた。

「姫さんよ。護衛の人達はどうしたんだ?」

「……」

姫さん……多分、リンの事を言つて居るのだが、リンは答えない。

「はあ、まあ確かにあれは嫌だと思つたじよ、あれはお前さんの為
にだな……」

ちくちくと地味に説教を続けていく。

つか、一体全体どうしてこうなつてゐるの?

「ま、私がお前さんの護衛についてから……他の奴らは後で説明しや
せるよ」

「うやら話が終わつたらしこ。

まあ僕と伊織は明らかに、おこづきぼりだけだ。

「おー、翔」

なぜか僕が呼ばれた。

「えーっと……色々と聞きたことがあるナビよ」

言葉を濁さずよひ。

「まあ……なんだ? あれだよ。姫さんの事だナビ……」

「あ、まつて……」

そこへ初めてリンが口を開いた。

「お願い……言わないで……黙つて……」

真剣な表情をしながら何度も言ひつ。

「護衛の事は誤るから……お願い……」

そして、だんだんと涙田になつてこくこん。

「……」

そんなリンを真剣に見つめる志穂さん。

「はあ……わかったよ」

そのままつてから。

「ただし、今後、こんな事はするなよな

いつもの笑顔で志穂さんとリンに向った。

リンは嬉しそうにうなづく。

「じゃあ、今から魔道具を申請してこへど」

いつも通りのテンションで先に行ってしまった。

「……」

で？

結局、僕はどうしたらよかつたんだ？

「なんか大変だつたね」

伊織が同情するように言った。

まあ色々とあつたが、あの場所から少し歩いた場所にまた移動した。
そこにつづくまでに、どうやらリンと伊織はすっかり打ち解けあい、
既に仲良くなっていた。

まったく、女の子ってのは凄いね～

そしてついた場所は大きな魔方陣が描かれていた。

「さて魔道具を作るわけだが……」

そう言って僕と伊織のほうをチラリと見る志穂さん。

「まあ初めて見る奴らが多いから説明しておく」

そう言つて魔方陣の中へ入つて行く。

「『』の魔方陣は『意識のシンクロ』と『契約』の意味がある」

意識のシンクロ？契約？

「まあ簡単に説明するとだな、入ると魔道具が出来る魔方陣だ」
かなり略したな。

「その魔道具は自分自身、つまりもう一人の自分みたいな物だ。だから魔道具は『』の世で一つしかない』大切な物だ」

そう言つて魔方陣の中から出てくる。

「まあ実際にやつた方が早いな、三人ともここに入れ」

そう言われたので、僕と伊織とリンは素直に入つて行つた。

「お前らは意識を魔方陣に集中させろよ」

志穂さんが完全に魔法陣の外にでた瞬間。

「…では始めますね」

先程案内してた女性の人が杖を構えながら呪文を唱え始めた。

「オリガントよ…我ら、精靈の名の下に」

魔方陣が光り始める。

「願う思い、集う力、偉大なる神々よ、彼らに精靈の加護を、力を
与えたまえ」

暖かい光に包まれ、気持ちが…

【 ドクン 】

「が！？」

ざわめく。

物凄くヤバイ感じがする。

これは…まさか！？

「ぐー…うー…？」

なんだ。今は満月ではないのに！

なのに…なんで！？

そう思つた時、僕の意識は闇の中へ消えた。

（宝条志穂視点）

「……ん？」

翔の様子がおかしい？

魔方陣の外から見ていたら、明らかに翔だけが苦しそうにしている

「どうしたんだ？」

術を発動させている女に聞いてみたが、の方も少し焦っているみたいだ。

「分かりません。ただ魔道具を具現化させようとしたら急に……」

「……」

「他の二人は大丈夫。
だが、翔だけが異常な感じ……」

【 ドクン 】

「！！」

変な気配がした次の瞬間。異常なまでの邪気が発生した。

「くー？ なんだ！？」

体を貫くような……いや、そんな生易しいものではない。
一体何処からだ！？
その魔力の根源は……

「翔から！？」

驚いた事に発生源は翔からだった。
しかしここで一つの疑問が生じる。

この邪気は明らかに人が出せるものではない。
それにこの世でも、こんな邪気はありえない。

「ぐー？ うー？」

翔が呻き声を出した瞬間。

ドサッ

倒れた。

「え…………？」

儀式を行っていた女性は呆然と立っていた。

「一体どうしたんだー！」

私が慌てて聞いたら

「一応儀式は成功しましたけど……」

未だに呆然と翔を見ながら言った。

「おい、姫さん！ 伊織！ 大丈夫かー！」

一人に近づいてみると… 眠っていた。

どうやら儀式の疲れがでただけみたいだ。

その証拠に、二人の手には魔道具が握られていた。

「…………翔は？」

問題は翔の方だ。

慌てて近づいてみた。

外傷は殆ど無く、同じじよつに歸つていた。

「…無事なようだな」

ほつと一息をついた直後、翔の隣に何かの気配を感じた。

「… 誰だ…？」

その方向にあつた物は……翔の魔道具であつた。

（番外編）登場人物紹介・簡単な説明（前書き）

これは・・・・まあ読んで見れば分かります。

（番外編）登場人物紹介・簡単な説明

今回は登場人物。世界観。魔法等の説明です。

他の人達の（読者の皆様の）参考になつたら良いです。

因みに、こじらの説明は『まだ小説で明らかになつていない』事もありますので、見たくない。知りたくない。そんな方は飛ばしてもかまいません。

あ、でも参考にしたい！一応見ておこう！と言つ人。ぜひ見て行ってください（^ - ^）

みょうじゅうる
明星翔

性別

年齢 16歳

レストランラーニング魔法学院所属

クラス：1 - A

能力ランク：? ? ? +

属性：風・雷・？

魔道具系統：太刀

本編主人公。流されやすい性格。見た目は普通よりはやや良い方。目の色が紅色である事意外は一般的な少年である。ただ、満月の夜になると、深紅の瞳を持つ龍になつてしまつ。

この体質は一般的には『結婚する人』以外には知られてはいけないらしいが、もうこの異世界に来てからどうでも良くなつたらしい。かなりの鈍感。趣味は読書。

宝条伊織
まうじょういおり

性別

年齢 16歳

レストランラニアン魔法学院所属

クラス：1 - A

能力ランク：A A

属性：火・光

魔道具系統：杖

翔の幼馴染で志穂の妹。姉と同じで、異世界の住民。翔には少なからず恋心を抱いているが、当の本人は気がついていない。性格は臆病な方で少し幼さを感じるが、これは親しい人しかい無いときで、普段は何でも出来る優等生である。料理が得意で、時々作っては翔や姉に味見をしてもらっている。怒ると怖い。

宝条志穂
まうじょうしほ

性別

年齢 21歳

現在はレストランラニアン魔法学院所属

教科担当：1年全般の技能教師

担当クラス：1 - A

能力ランク：S +

属性：？・光・？

魔道具系統：ハンマー

伊織の姉で最も謎が多い人物。色々な事を知っていて、この世界に

色々な情報網をもつていて。大雑把な性格で猪突猛進。よく言えばマイペースな人である。いつも笑顔を絶やさない。

時々皆を巻き込んで色々と迷惑をかけている。そのたびに学年主任に怒られている。

何気に、無詠唱魔法が使える。

リン・クレンジエン

性別

年齢 15歳

レストランラニアン魔法学院所属

クラス：1-A

能力ランク：A

属性：水・氷

魔道具系統：弓

魔道具を申請する時に翔に会った。志穂とは知り合いで、そこら辺がまだ良く分からない。（分かる人には分かるが）活発で明るい性格。伊織とは結構仲が良い。伊織と同じく恋心を翔に抱いているが、当の本人はまったく気付いていない。

みょうじょう
明星父＆母

年齢 どちらも不明。

現在旅行中。翔を異世界に連れて行かせた（追い出した）張本人たち。

家を売り払つたり、婚約届けを出してしたりと、色々悪事・・・・。

もとい、息子のためにやつた。（翔談：あれはただの馬鹿親だ）
こちらの世界（異世界）にはきていない。

ここからは後に登場する人物。（もう少し下は世界観、魔法について）

雪村宗助

性別

年齢 16歳

レストランラーニアン魔法学院所属

クラス：1 - A

能力ランク：A -

属性：土・砂

魔道具系統：槍

この学院に来て初めて知り合った男友達。かなりの美形。能天氣。

柳嵯楓

性別

年齢 15歳

レストランラーニアン魔法学院所属

クラス：1 - A

能力ランク：A +

属性：水・闇

魔道具系統：刀

この学院に来て知り合つた女友達。大人しい感じ？。宗助とは幼馴染。

草陰沙紀
くさかげ さき

性別

年齢 20歳

レストランルラニア魔法学院所属

教科担当：魔法歴史

担当クラス：学年主任

属性：木・花

魔道具系統：杖

学年主任。のんびりとした性格で志穂とは知り合い。

ちょっととした魔法の知識。

世界観

科学と魔法の共存。

しかし、科学はあまり発達しておらず、魔法技術の方が強い影響力がある。

例）車はあるがエンジンが魔力といった感じ。

魔物

この世界には魔法の影響で、不自然に歪んだ生き物たちが存在する。それが魔物である。魔物は人に危害を加えるため、それらを討伐する組織がある。

因みに魔物にもランクがあり。

一番低い順に E・D・C・B・A・S・Gとなっている。

魔物はレベルが高くなるにつれ知能や能力が高く、危険度も高い。Aランク以上は人語も理解できるらしい。

職業

一般的には普通の社会と同じだが、この世界では主に魔法に関する職業が多い。

例えば、魔物を狩る職業。魔道具を生み出す職業。魔導書を製作する職業などなど・・・

魔法の属性

属性は主に12通りあり

基本精霊術は『火・水・土・木・風』

中級精霊術は『炎・氷・砂・花・雷』

上級精霊術は『光・闇』

さらに上にあるのが『古代魔導術』主に禁呪と言われる物だ。

この古代魔導術は『基本精靈術』と『上級精靈術』が元になつており、種類は『獄・蒼・地・樹・暴』『天・冥』がある。

一般的には『基本精靈術』に加えて、自分で最も得意とする『中級・上級』を1つか2つ使うのが基本である。

魔導書

魔導書とは、魔力が込められて売られている本。

この本には魔力が込められており、その性質を理解した者に力を与える。

しかし理解できたからと書いて、魔導書の魔力を、発動させる程の魔力が無ければ使えない。

魔道具

魔道具とは、自分の魔力を使って出来た道具。

この魔道具は作り出した者にしか使えない。

魔道具は主に魔法発動体として使用する。

それ以外は武器として使用したりする人も多い。

能力ランク

能力ランクとは、その人が持ち合わせている能力、潜在力、危険度

を総合的に表したものである。

一番高くて『SSS』ランク（実はこれよりも高いランクが存在するがそれは別である）

一番低くて『E-』ランクである。

一般的には『C+』から『D-』あればよい。

因みに翔たちが通う、レストランラーニング魔法学院は優秀な学校で、基本的に『B』以上で無ければ入れないらしい。

以上で簡単な説明を終わります。

（番外編）登場人物紹介・簡単な説明（後書き）

所で……僕は一つ思った事がある。

翔「唐突になんですか一体。」

この作品は……本当にファンタジーでよいのか?と。

翔「……それは一体どうこう事だ?」

自分のには異世界学園コメディーを書いているつもりなのだが……
・どうもね~

翔「別に良いんじゃないですか?」

そうなのか?前に友達に聞いたら『これってなに?ラブコメでも書くつもりなのか?』って言われた。

翔「はあ……まあ大変ですね」

おいおい他人事かよ。

翔「だつて、最後にはあんたが決めるんだろ?」

いや、読者が決めるんだ。

翔「は?どういう事?」

も「」の際だから、読者に決めてもらおう。

翔「いいのか？」

いいんだよ。

つてな訳で、この小説を読んでいる皆様方、
『ファンタジー・学園・コメディー』
どれに当てはまるか自分に教えてください。

翔「……所で、教えてもらつてどうするんだよ」

そっちに近い感じで書いてこいつかなーと思つて。

第十一話 始まりは遅刻とコウオチ（前書き）

やつとのこた学園編です。

前置きが長かつたな・・・

第十一話 始まりは遅刻といつオチ

朝日が眩しい。

「うへん・・・・なんか気分がいいな」

寝起きのためか、頭がボーッとしている。

「こんな清清しい日には、きっといい事がありそうだな」

周りを見ると誰もいない。
まあ一人部屋だからね。

「それにしても・・・・・」

いやに静かだな。

いつもなら伊織が姉を起こしたり、志穂さんが朝から酒を飲んでいたりと五月蠅いのだが・・・・

「はて? 珍しいな」

まあ深くは考えないよひにしよひ。

「やう言えば今日の予定はどうなつてゐるんだ?」

少し離れた所にカレンダーがあった。

どうやらこの世界も、僕らの世界同様、四季や日数は同じらしい。

「今日は・・・・え?」

その日は・・・入学式?
はて・・・入学式?

一体何の・・・つて僕達の入学式じゃん!!

「今日は入学式だったのか!?!?」

枕もとの時計を見てみる。

現在、9時45分。ここから学院までは約20分は掛かる。
入学式は10時から始まるので・・・・・遅刻になる。

「げー!?!?」

これじゃ間に合わない!!

「へへー!?!あのー人わざと見捨てたな!?!?」

ひつひつて慌しい朝とともに、僕の学院生活が始まった。

時刻は10時30分。

初っ端からの遅刻は避けたかったが、どう見たって遅刻する時間なので、諦めてのんびりと来たらこんな時間帯になってしまった。
まあ人生諦めが肝心とも言つしな。

「それにしても・・・無駄にでかいな」

現在僕がいるのは校門。

ここから見ると西洋の城か、何処かの要塞と言つた感じだな。

それにも・・・・・綺麗な所だな。

古い建物と聞いていたが、意外と整つている。

これも魔法のおかげかね？

そんなこんな考えながら、正門らしき所を通つて中に入る。

勿論今は誰もここには居ない。僕のみだ。

「さて・・・どうしようかな？」

入学式は11時まである。

まあ、途中から入つてもいいけど、場所は知らない。
おまけに途中からと言うのは、少し恥ずかしい。

「しかし、こんな所によくもまあ入れたもんだな」

聞いた話では、この『レストランラーラン魔法学院』は魔法関係ではかなり有名な学校で、名門中の名門とまで言われているらしい。
どんなに優秀な人でも入るのは難しいと言われている程だ。
どうしてこんな所に入れたのかが謎なくらいである。
ここに入れた本人、志穂さん曰く『私つて以外と有名なんだよね~』
と言つ一言でかたづけてしまった。

ある意味身近な人で最も謎な人物でもある。

「で・・・・・結局僕はどうすればいいんだ？」

一応、昨日作られた魔道具は持つて来てはいるが、重くて邪魔にしかなら無い。

「そう言えば・・・・昨日、魔道具を申請しに行つた所からの記憶

が無いな

今さらだが、そう思った。
あの時、急にあの衝動にかられたんだよな。
本来、満月の時にしかない。
あの衝動に・・・

「まあ、なんとも無かつたんだからいいか」

だけど、一応気おつけておこう。
なんせこの学校は普通とは違う。
ここは魔法の学校だ。
注意してて損はない。

「まあそれよりも、今の状況をどうにかしないとな」

一人寂しくつて言つのはどうこうもんかね。
と思つていたら。

「おや？」

少し先に進むと、誰かが居るではないか。

「僕と同じような人かな？」

同じような人』遅刻した人という事だ。
相手に気付かれないように、そそくさと近づいてみると。
二人の男女が、建物の入り口の前にいた。

「あれ? もしかして・・・・僕達遅刻?」

のんびりした口調の少年が隣の少女に言つ。

「当たり前だ馬鹿者！？だから早く起きると私は言つたのだー！」

隣の少女がその少年を怒鳴つた。

「け、けどさ・・・僕は先に行つても、良いつて言つただろ」

「うむれー。黙れ馬鹿。阿呆。鈍聞。」

「どうやら取り付く島も無いようだ。

見てて面白い。

しかし僕と同じように遅刻した人がいるとは・・・なんと言つていいやら。

「まあもう過ぎた事だし・・・」

そう言つて。

「同じような人があそこにも居るみたいだしな

僕が居る方向を見ながらつた。

「あら？」

気が附かれた？

「そこに隠れてる人。出てこい」

凛とした声で言つてきた。

どうやら既にばれているらしい。
なら素直に出て行くとしよう。

「やあ、どうもー。」

軽く笑いながら、一人の所に行つた。
まあ第一印象が肝心だしね。

「やあ、どうも」

少年は僕の声に反応して挨拶したが、少女は・・・・・

「お前、私たちに何かよつ?」

敵対心バリバリだった。

どうやら、少し機嫌が悪そうだ。

「い、いや・・・・・べつによつて訳じや・・・・・

ぎこちなく僕が答えたら。

「楓。八つ当たりであんまり威嚇しない方がいいよ

少年がなれた口調でその少女に言つた。

「・・・・・」

当然睨まれた。

しかしそんな事は気にせず、自己紹介をしてきた。

「僕の名前は雪村宗助。ゆきむらむねすけで、」いつの子ね・・・・・・・・

「柳嵯楓やなぎざかえでだ」

少年・・・・・雪村が言つ前に、その少女。柳嵯さんが答えた。

「僕の事は宗助でいいよ」

そう言つてからジーット僕の方を見てきた。

「？」

僕がどうしたのかと思つた。

「君の名前は？」

のんびりと聞いてきた。

そう言えば僕は言つてないな。

「僕は明星翔みよつじゅうよんじく

「よんじく~」

二ヶコリと笑いながら挨拶した。

「・・・・・」

「からの方ははぶすつとしながら僕を見ていた。

「あの…………」

「…………なんだ？」

「よひじく。柳嶋さん

「…………」

少し僕を見ながら。

「…………私は楓でいい。」

それだけ言った。

「照れてるの？」

宗助が楓さんにそう聞いたらい。

「阿呆か」

と軽く睨まれた。

第十一話 始まりは遅刻とコツオチ（後書き）

あとがき劇場（僕龍貴姫編）

「ここまで来るのが長かつたな。

翔「そうだな。」

「」の話は一応、異世界学園ハブロメと言ひ話だからな。

翔「また色々と戻りつくるな。」

「」の話は一応、前あとがきで読者の皆様方に聞いたたら、これでいいみたいな事になつたわ。

翔「まあ無理の無いよつにしとけよ。」

そうする。

翔「所でこきなり遅刻つて……。」

まあ気にするな。

翔「そうあるよ。」

まあ、それはさて置き、感想やアドバイスをくださつた読者の皆様。どうもありがとうございました。まことに。

これからがメインみたいな感じなんで、宜しくお願ひします。
感想、評価、なんか要望があつたら言ってください。

第十一話 魔道具覚醒（前書き）

やばいです。

え？ 何がやばいかつて？

長いんですよ。半端なく。

頑張つて書いたのはいいんですけど、メチャ長くなつてしまいま
した。

感想と評価、待っています。よろしくしくお願ひします。

第十一話 魔道具覚醒

やる事がない（遅刻した）ので、この一人としばらく話す事にした。
・・・・それにもこの一人。美形だな。
さつきは遠くから見ていたから気付かなかつたけど、かなりのものだ。

宗助の髪は綺麗な銀色。瞳は薄い青色。身長もけつこうあるし（170cmくらい？）おまけに顔立ちが整つてゐるから、誰がどう見たつてクールな美少年だ。

・・・・ただし、喋ると明らかにその印象は変わるけどな。

楓の髪は茶色く、後ろにまとめてゐる。まあ俗に言つポーテールつてやつですね。それがかなり似合つてゐる。瞳は宗助と同じような色で、凛々しい顔立ち。身長もそこそこあり（多分僕と同じか、それ以上）理知的な印象だ。

こういつた人はきっと同姓から持てるだらうな。

まあそんな感じでこの一人はかなりの美少年、美少女だと言う事だ。この一人があつて、さらに僕もこの一人と知り合つたんだから、本当に世の中つて不思議なめぐりあわせをしてゐるよな。
そんな事を思いながら話をしていると、宗助が気になる事を言つだした。

「さつ言えば、翔の魔道具つて珍しい形してゐるね

宗助が僕の背中に背負つてゐる魔道具を見ながらさつとつた。

「確かに、鞘に納まつた大剣なんて聞いた事が無いな

同じように僕の魔道具を見ながら言ひつ榎さん。

「え？ そうなの？」

てつくり、似たような魔道具が他にもあるのかと思つてた。

「うん。だつて大剣の魔道具は鞘に入らないし、必要がないから、刃をむき出しにしているんだよ」

「私も、大きいけどそんな細い形状で鞘に納まつている大剣なんて見た事もないし、聞いた事もないな」

「ほ？」

「これってそんなに珍しい物だつたのか？」

「ま、僕はそんなに詳しいわけじゃないけどね～」

でもかなり参考になつたぞ。

「因みに僕の魔道具はこれだよ」

そう言つて宗助は自分の前に手を突き出して。

「こい『地竜槍』！～」
ワイヤーム

その瞬間。

宗助の前に槍が現れた。

「どう？僕の地竜槍。感想は？」

「…………でかいな」

かなりでかかつた。宗助の身長を軽く超える大きさだつた。色は黒く。形は槍というよりはランスの方が適切だろ？昔の騎兵が持つていそうな形状だつた。まあそれにも驚いたが、一番驚いたのは

「…………どうやって出したの？」

確か宗助が手を出して……なんだつたけ？ワームだつたけ？

「地竜槍だよ」

「やつ、それ……」

そう言つたら突然でてきたんだよ！

「あれ？翔は魔道具を作つて、登録しに行つたんだよね？」

「ああ、行つたぞ」

作つてはもうつたが、僕は氣絶してたため、登録は……志穂さんがしてるだる。

・・・・・多分。
いやまた・・・・してないかもしけない。
なんせ志穂さんだし。

「その時に教えてもらわなかつたの？」

「は？」

「教えてもらひつつ？何が？」

「なるほど、やつぱつ事か

楓さんが僕の様子を見て納得した。

「へ？」

「やつぱつ事？」

「どうせ、翔は魔道具は作ってもらひたが、使い方を教えてもらひつつてこなにようだな」

「え？ 楓さんやつぱつこと？」

僕の頭に沢山のマークが出てくる。

「本来なら、魔道具を申請して行った時にレクチャーがあるので…」

「レクチャー？」

「そんのがあったのか！？」

「ずっと気絶（今日の朝まで）してたから受けないぞ…！」

「やつぱつ受けこないみたいだな」

「どうせやら表情に出していたじへ、呆れていた。

「どうして受けなかつたんだ？」

「や、それは……」

「……と氣絶してたからなんだよ～
と言つたら、間違いなく恥をかく。
それだけは嫌だ。

なんか僕のプライドが許さない。
……まあプライドなんてもとむと無いにけビ。

「……」

そんな僕を見ていた楓さんが。
軽いため息をつき。

「教えてやつてもいいぞ

そう言つた。

「……え？」

「ほ、本当に？」

「いいのー？」

「別にかまわないぞ、どうせ暇だしな」

誰かさんのせいでな。と少くともやつた。

多分だが、その『誰かさん』とは宗助の事だろ。当の本人はのほほんとしている。

「では早速始めるとしよう」

そう言って手を前に出した。

「いいが、私がするのをちゃんと見ておくんだぞ」

そして・・・・・。

「いですよ『水神女帝』^{テイアマト} 召喚!!！」

そして出てきたのは・・・・日本刀?
そう、薄い水色の日本刀・・・にしてはちょっと大きいな。
大きさでいえば、野太刀の部類だろう。

「これが私の魔道具。水神女帝だ」

そう言って僕の方を見て。

「翔。その魔道具の名前は?」

またよく分からぬ事を言われた。

「え?名前?」

「そうだ名前だ。魔道具は物だが唯の物ではない。その存在を示す名があるんだ」

「へー、やつなんだ」

「お前が分からぬのか？まあ、お前の魔道具はまだ覚醒もしてないよつだしな」

「覚醒？」

「なんじややつや？」

「覚醒といふのは、お前を読んで魔道具を起こす事だ」

「為のせび・・・・・つまつ。

「僕の魔道具はまだ睡眠状態つて」とへ.

「まあ、簡単に言つてやつ言つて事だ」

「勉強になるな～・・・・・ん？」

ところが伊織やリンはもう覚醒を済ませてゐつて事になるよな？

・・・・・「げ！？」じやあ僕だけやつてないんだ！――

軽く落ち込むな・・・・

「ん？どうした？」

「いえ、ちよつとした内密事情みたいな物ですから気にしないでください」

「「は？」」

一人そろそろ訳がわからぬと言つた感じだった。

「まあよく分からんが・・・再開していいか?」

「あ、いいですよ」

「氣を取り直してやる事に。」

「まずは自分の魔道具の名前を知るために、聞く事が大事だ」

聞く事?

どうやって?

「まずは自分の魔道具を持って」

言われるがままにそうした。
・・・・・結果。

「お、おもい!?」

相変わらず重かつた。

「それはそうだよ」

宗助が苦笑しながら。

「まだ魔道具は覚醒していないからね。そのぶん重いんだよ」

「まあ、覚醒したら少しは軽くなるだろ」

「ほ、本当にか?」

嘘を言うんじゃないぞ！

つてか嘘だつたら泣いてやるぞーー！

「阿呆か」

軽くあしらわれた。

「まずは集中しろ、そして魔道具に意識をあわせるような感じでいけ」

「わ、わかった」

まずは集中だ。

・・・・・・・。

神経を研ぎ澄まして・・・・・意識を魔道具に・・・・・。

すると突然、魔道具が光りだした。

「・・・・・すごいな」

関心しながら宗助が楓に聞いた。

「あんな曖昧な説明でこれだけ出来るつて・・・・・もしかして翔つて天才なの？」

「天才・・・・・いや才能じゃないか？潜在能力が高いとか？」

少し考えながら楓がそう答えた。

「せつかもね」

そんな風に一人が会話をしてくる間、翔はずつと魔道具に集中していた。

『お~い、魔道具をいじるか?』

・・・・・

『お~い、返事をしに』

・・・・・

『あの~すいません。返事をしてください』

・・・・・

『お願こします。答えてください』

・・・・・

『・・・・・せつなんだかだるくなつたな』

・・・・おこ。

『わ~かと聞ひつかな』

おこ、返事をしに。

『おわ！？なんだ一体？』

何だとは失礼なやつだな。お前が俺を呼んだんだろうが。

『つて事はお前が魔道具の・・・・なんだつたけ？』

化身だろ化身。

『そりゃ、それだ！』

まつたく、人様が寝ているのに起こしやがって、お前何様だ？

『あるじ様だよ』

阿呆か？それとも馬鹿か？

『お前失礼なやつだな』

何とでも言へ。

『それよりも、もう起きる』

なにがだ？

『さつあと覚醒してくれって言つてるんだよ』

為るほど・・・・だからこりまで来たのか。

『さうだよ。まつたく、ずっと寝てやがって・・・・お前かなり重

たいんだぞ』

何言つてやがる。俺は最初は起きてたぞ。

『・・・・え?』

なのにお前は俺を作った瞬間に寝やがつて・・・・お前じや何様だよ。

『そ、それはすまなかつた。僕が悪かつたよ』

ふん。分かればいいんだよ。

『所で早く起きてくんね?お前かなり重くて、腕がもげちまうぞうだ』

『うか?俺はまだ眠つていいんだが・・・・・

『そこを何とかしろ、僕の魔道具だろ?が

分かつた。分かつた。起きてやるよ。

『じゃあさつわとお前を言つてくれ

大事な事だからな、ちやんと覚えろよ。

『分かつた

じゃあいぐせー俺の名前は・・・・・・

そして意識が現実に戻つた。

「こい『暴龍騎士』！！！」
ランスロット

その瞬間、魔道具が輝いた。

第十一話 魔道具覚醒（後書き）

あとがき劇場* 僕龍貴姫編

や、ビツモ、作者の伊藤です。

翔「ビツモ」

それにしても・・・・・今回だけはへなつたな。

翔「長い割には、話が進んでいないがな」

「うべー？ い、痛いといふのを・・・・・

翔「ま、そんな訳で、読者の皆さん。気長に見てやつてください」

自分からもよろしくお願ひします。

翔「ここで僕らの魔道具の意味を少し説明したい」と思っています

ネタばれもありますけど、参考にはなると思います。

* 魔道具*

名前説明。

* 地竜槍*

ワイアーム

ワイヤームといつのはワームの事で、よくゲームなどに出でくる地竜のことです。ドラゴンの中でも古い竜、生命力が高く、または手足や翼を持たないものを指します。まあ簡単に言えば、古くから伝わる伝統のドラゴンです。だから宗助君の魔道具は、名前の地竜槍がそのままドラゴンの意味を指します。

* 水神女帝*

これも名前の通り、女神です。ただし唯の女神ではありません。バイロニア神話で初めて登場した女神です。ティアマトーは人間が住む世界が完成する以前に、子孫である神々と戦つた。そして戦つた結果。負けてしまい、その亡骸がが人の世界となつたのです。

天空、大地、星、これらは全てティアマトーだったのです。英雄に滅ぼされし原初の女神。それが楓さんの魔道具です。

* 暴龍騎士*

これは有名な名前で読者も知つてゐると思います。ランスロット。『コードギアス 反逆のルル・シユ』のスザク君が乗つてゐるナイトメアの名前でもあります。この意味はアーサー王物語の円卓の騎士の一人です。王妃グニエーヴルの恋人となり、その罪により聖杯探索に失敗。また理想の騎士として描かれている。

これは意味どうり、この話でそつたつていく可能性がある事を示しています。暴龍騎士の暴龍は彼、翔君のもう一つの姿の意味でもあり、大切なものを守ると言う意味での騎士と言つ意味でもあります。因みに、コードギアスでは、文字通りの意味で、ランスロットに乗つてゐる、スザク（騎士）がユーフィミア（王妃）の恋人となり、

コーエイニア（王妃）を守れなかつたため、自分の大切な者を失つた。まさにラシスロットの名をそのまま背負つてゐる。（これは一部偏見になるかもしれないのであしからず）

以上が、今回の説明（解説）です。
多分間違ひはないと・・・思います。
もし間違つていたらすみません。
なんせ覚えている範囲だけ書いていますからね。

第十一話 とつあべや終わつ? (前書き)

遅くなつてしまい、すみません。
あと今回の話はかなり短めです。
直ぐに書いてこきますので見捨てないでください。

第十二話 とつあえず終わり？

精靈は歌つ。

大いなる力。

全ての万物を司らん。

その命。

その魂。

そしてその屍でさえも。

その力、守るべき者の為。

しかし。

その力は。

罪でもあり。

罰でもある。

それでも力を願うのならば。

唱えてみよ。

我の名は、^{ランスロット}暴龍騎士。

共に戦う者なり。

その声が頭に響いたと思ったたら、急に光が弱くなつた。
そして完全に光が消えた時。

覚醒した魔道具が姿をあらわした。

「これが僕の魔道具『暴龍騎士』」^{ランスロット}

綺麗な赤に、鮮やかな模様の黒。

形状は見た感じ大剣？（大太刀らしい）

全長2mといった所だろう。

覚醒する前とは大分違つた形になつていた。

「どうやら、上手くいったみたいだな」

僕の魔道具を見ながら頷く楓さん。

「では次の段階に……」

と何かを言いかけていた所で。

【キーン。コーン。カーン。コーン】

学校のチャイムがタイミングよく鳴つた。

「むつ、もう時間か」

どうやら結構時間がかかったみたいだ。
そのチャイムが鳴り終わったのと同時に、目の前の建物から沢山の
人が出てきた。

「時間になつたことだし、僕らも移動しようか？」

それまで黙つっていた宗助が口を開いた。

「そうだな、とりあえず覚醒は済ませたことだし」

「そうだね・・・・って」

僕も同じように同意しようと思つたが、ここで問題が発生した。

僕つて一体何組なんだ？

「ん？ どうかしたのか？」

僕の変な様子に楓さんが聞いていた。

「い、いや、僕つて何組なんだろって思つてさ

そんな僕の悩みに宗助が一言。

「それなら大丈夫だよ」

「え？ なんで？」

クラスが分からないと移動のしようがないだろ。

「まあ、とりあえず移動すればわかるよ」

暢氣に言つ宗助。

「確かにな」

同じく、平然としている楓さん。

「・・・・・」

そんな一人をよそに僕は心配だった。

第十二話 とつあえず終わつ? (後書き)

あとがき劇場* 僕龍貴姫編

やあ読者の皆様方。伊藤です。

翔「今回もあんまり進んでいないし、話が短いな」

・・・・・「めん。色々とあって・・・・書く時間が無くて・・・・それに前期講習が始まつて・・・・それに微妙に憂鬱気味で・・・・

翔「まあ、色々とあつた訳か

そう――そうなんだよ――

翔「だがそれはいい訳にすぎんだろ」

・・・・・ そうだな。

翔「今度はもつと頑張れよ」

そつするわ。

翔「今回の説明は何かないのか?」

うへん。次回はあるけど、今回は「れと言つた事はないな。

翔「そうか」

あ、一つだけあつたわ。

翔「なんだ？」

この小説を見ている皆様方。

感想、評価ありがとうございます。

皆様方の感想や評価を見て、元気づられて頑張つて書いています。
これも読者様のおかげです。

これからも感想や評価をどしどしまっています（感想だけでもOKです！）ので、宜しくお願ひします。

第十四話 クラスの分け方

「あの・・・これは何ですか?」

二人に連れられて、ついた場所は変わった所だった。

「魔方陣?」

ついた場所には魔方陣があつた。それもかなりの大きさ。
前に魔道具を申請しに行つた時と同じ位の大きさだが、少し変わつた形をしていた。

その魔方陣は『円形』ではなく『六角形』だからだ。

「こ」の魔方陣は・・・まあ、乗れば分かる

説明よりも実際にやつた方が早いと判断して、楓さんがその魔方陣の中に入つていつた。

「ちゃんと見ておくんだぞ」

そう言つて、一言。

「ジャンプ
跳躍」

そう唱えた。
その瞬間。

楓さんの姿が消えた。

「えーと、何処に行つたの?」

僕が不思議に思つていたら。

「自分のクラスに行つたんだよ」

宗助がよく分からぬ事を言つた。

「自分のクラス？」

「どう言つことだ？」

「「」の魔方陣は『クラス分け』の役目があるんだよ」

クラス分けの役目？

何だそりや？

「簡単に説明すると、「」の魔方陣の上で呪文を唱えたら、自分のクラスに行けるんだよ」

「・・・・・為るほど」

とどのつまつ、「」の魔方陣の上に乗れば自分のクラスに行けるつて事だな。

なかなか便利なものだ。

「でも欠点があつて『つしまで自分のクラスが分からぬ』つてことなんだよね」

確かにそれも一理あるな。

この方法だと、友達と同じクラスになれるかが分からぬからな。

「まあこの方法は、学校の伝統みたいなものだからね」

「やっぱり、どの学校にも伝統はあるんだな」

・・・・伝統があるのは学校だけとは限らないけどね

宗助が苦笑しながら言った。

「それよりも早く行かないとまずいんじゃなし?」「

え？ なんて？

一楓が痺れを切らして「ちに来るかもしれないから」

・・・・・ 楓さんにて どんなだけ短気なんだ?

ジャンプ

二人同時に唱えた。

そして付いた先はには・・・・・。

「俺の歌をきけええええ！」

見慣れた馬鹿（志穂さん）が居ました。
しかもはた迷惑な事に歌を歌つてゐる。

「むつ？」

その馬鹿はこちらを見て。

「…………あれ？ なんで翔がここに居るんだ？」

今頃気付いたのかよ。

しかもかなり驚いてゐるし。

「おかしいな……呪文を間違えたか？」

何か一人でぶつぶつ言い出した志穂さん。
そんな時だった。

「もしかして……翔？」

「ん？」

誰かが僕を呼んだ気がして、後ろを振り向いたら。

「え！？」

そこにいた人物はリンであつた。

第十四話 クラスの分け方（後書き）

あとがき劇場* 僕龍貴姫編

・・・・予定通りにはいかないものだな。

翔「世の中そんなもんさ」

話しの構造はある程度できてるけど、自分の文章力が貧弱すぎて、追いつかんわ。

翔「まあ頑張れとしかいい用が無いな」

検討はする。

翔「どうでもいいけど、今回はまた微妙なところで終わつたな」

まあ、気にするな。

翔「逆に気になるわ」

そんな事はさて置き、感想と評価をしてくれる読者の皆様方、いつもありがとうございます。

読者数が一万を突破したのも読者の皆様のおかげです。これからも宜しくお願いします。

第十五話 始まる学園生活（前書き）

遅くなつてすいません（汗）

もう少し早く書き上げたいと思います！！

なので、これからも応援、宜しくお願ひします！！

第十五話 始まる学園生活

よくよく考えてみればありえない話ではなかつた。
なんせ彼女も今年から学校にはいるといつていたし、僕が知らなかつただけで、同じ学校に入学する事だってありえる話しだ。
まあ、そんな訳で・・・

「どうして言つてくれなかつたの？」

なぜか怒られます。
・・・なんでだ？

「いや、僕だつて同じ学校とは思つてなかつたんだよ

それに、僕はこの学校の名前すら知らなかつたし。

「ふうん・・・そんな事言つんだ

どうこつた訳が、「機嫌斜めの」様子です。
さて、どうするべきかね。

そんな悩んでいる時、誰かが僕の肩を叩いた。

「ん？」

振り向いて見たら。

「やあ、翔」

「どうもだ

宗助と楓さんだった。

「二人ともなんでここに？」

「同じクラスだから」

「それ以外に理由があるか？」

「まあ、理由は無いけど・・・・ん？」

後ろの方から妙な視線を・・・・
振り向いて見ると

「・・・・」

視線の人物はリンと伊織だった。

・・・・いつの間に伊織が？

あとリン。さつきより不機嫌になつていなか？

「翔君・・・・」

「ねえ、その人たち誰？」

微妙に一人の痛い視線を（僕に向けて）受けつつ、素直に答える。

「さつき知り合ったばかりの・・・・

「僕は翔の友達だよ」

「私も似たようなものだ

いつの間にか友達にランクアップしている。

「そ、そりなんだ……」

「ふーん……」

納得したような、してないような表情で、宗助と楓さんを見ている。
・・・・・どっちかと言うと、楓さんの方をジーっと見ている。
まあ、同姓でも綺麗な人だと思うからな。けど、そんなジロジロ見
るのはどうかと思う。

「カツ」「いい・・・・・」

「・・・・・綺麗な人達だね」

「そりだな」

「・・・・・」

なんでそんな目で僕を見るんだ?
僕は素直に答えただけだぞ。

「翔君って、ああいつた子が好みなの?」

いきなり何を言い出すんだリンよ。

「僕はそんな意味で言つたんじやないよ」

「…………うん」

「…………分かってるよ」

「いや。絶対分かつてないだろ」

最初の間は何だよ。
明らかに疑ってるだろ。

「はいはい三人とも、ここは一応教室だから、痴話喧嘩は後でね」

「そうだぞ。つたぐ、見ているこっちが恥ずかしい」

宗助と楓さんの言った言葉に、リンと伊織が反応して赤くなつた。
それと同時に周りの人達もこちらに注目する。

「あ、あう…………」

「うう…………」

周りの目線にさらになくなる一人。

「僕は分かつているけど…………」

「そう?ならいいけどね」

「ヤーヤしながら言つ宗助。」

そんなニヤついた顔で笑うな。

「努力はするよ」（ニヤニヤ）

・・・・明らかに努力する気は無いみたいだ。

「はいはーい！－諸君ら、席に着け～」

先ほどまで歌を歌っていた馬鹿（志穂さん）が教師らしく皆に言ひ。

・・・・教師？

「あの志穂さん」

「！」では先生だぞ～翔君」

先生つて事は。

「・・・・マジで先生？」

「本気と書いてマジだ。ついでに言つならば、真剣と書いてマジとも言つぞ」

だれもそんな事まで聞いとらんわ。

それにも志穂さんが教師か・・・・

「世も末だな」

「翔君は相変わらず失礼だな」

微妙に引きつった表情をしながら。

「これから一年間。このクラスの担任になった、宝条志穂だ。宜しくな！」

この先、色々と心配なことがありそうだけど、どうにかなるかね?
かくして学園での生活は、一応無事に始まつたという事だ。

第十五話 始める外園生活（後編）

あじがき劇場* 僕龍貴姫編

やつとのじやで更新だ。

翔「遅いわ馬鹿者」

「う・・・だつてわ、モンハンアソウをしてたら遅くなつたんだもん。

翔「いい訳は無しだ」

すこませんでした。

翔「つたぐ、程ほどじておなかよ」

努力はする。

翔「んで、これから」の話しがじつなるの？」

ん~まあ、少しずつって訳では無こなび、結構、恒口へ、おかげへ、時々真面目にって感じかな?

翔「まあ頑張れや」

お、あ、読者の皆様方。

こつも応援ありがと「」やこます。

僕自身まだまだ未熟ではありますけど、これからも応援宜しくお願
いします。

翔「なんか、かなり真面目だな」

まあな、サボつていた分これからは頑張るからな。

翔「そうか」

あ、あと次回のあとがき劇場はリン、伊織、志穂さんの魔道具の解
説をしたいと思います。

見たい人は、今度のあとがきを期待していくください。
それではまた次の話で~

第十六話 傍から見れば何とせらひへ。（記書を）

えーっと、いい訳はあとがきでつて事で……

第十六話 傍から見れば何とやう?

入学式から次の日。

現在。担任の授業とは言うが殆どやることが無い。まあ正確に言えば、担任の先生（志穂）が昨日調子に乗つてお酒を飲みすぎて、一昨日酔いでダウンしている。そのため全然やる気が無いらしい。

一応簡単な自己紹介を一通りしたが、一向に動く気配が無い。もう今日の授業は諦めた方がいいだろうと思つていた矢先に、志穂さんが重大発言をした。

「……新入生諸君。これから君達の技量を測るために模擬戦をする事になつてゐる」

志穂さんが気分悪そうに言つた。

「……当然だか、今の言葉にクラス全体がざわめく。
事になつてゐる」

「模擬戦つてなんだ？」

「模擬戦つて何をすればいいんだ？」

「対人戦みたいなものか？」

「俺らの実力でも見るんじゃない？」

「じゃあテストなのか？」

と色々な所から模擬戦について話が聞こえる。

簡単に聞いた話を纏めると、実力を知るためにクラス内の模擬戦闘をするという事か。

「ええい！……うるさい！頭に響くだらうが……オエツ」

あまりにもうるさかつたので、バン！…バン！…と教壇を叩き、生徒を静める。

つてかあんた本当に大丈夫か？最後は吐きそだつたぞ。そして周りが静かになるのを確認してから説明を続けた。

「お前らが言つとおりだ。これはあくまで技量を測るだけであつて、成績とかには響かないから安心しろ」

そう言わると余計に安心できないんだ。
と思うが口には出さない。
何故なら・・・・

「うつ！なんか色々リバースしそうな感じで……オエツ！」

とかなりピンチ状態に陥っている。

だから昨日は止めとけって言つたのに。

「…皆さんは先に第一ドームへ行つてください。先生はちょっと保健室に寄つてから行きます」

フラフラでかなりだめダメオーラを出しながら先に出て行つた。
これから先がかなり心配になつたのは言つまでも無い。

「そんな訳で場所は変わってドームへ

ドームと言つのは僕の居た次代で言つ体育馆みたいなものだ。
場所は3種類在つて、それぞれの学年によつて場所は決まつている
らしい。

ドームはよく模擬戦や演習訓練に使われる場所で、ある程度の攻撃
じゃビビつつかない。

そのため召喚魔法もここで行われるらしい。
まあ聞いた話だから、本当はどうだかしらんが。

「おーい。みんな集まつてるか?」

僕らが到着してから2~3分後に、志穂さんが到着した。

「多分そろつていますよー」

周囲を見ながら宗助が答える。

なんかクラスの代表のよつた感じだな。

「なら初めてもいいか」

一応生徒が全員いるかを確認しながら、説明を始める。

「これから一人組みのパートナーをつくってください。説明はそれ
からしまーす」

パートナーか、僕は誰と組もうかな。

「翔君！」

「伊織か、どうかしたか？」

「あ、う、その…」

もじもじと顔を赤くしながら何かを言おうとする伊織。

「パ、パートナーを私と「あ、翔！」…………くつ？」

伊織が何かを喋っていたときに隣から声が割り込んできた。

「リンか」

「お~いえす

「や~やしながら」近づいて来て。

「ねえ、私と一緒にくま「ダメです…」…………あい？」

今度は伊織がリンの言葉を遮り切った。

「む、邪魔しないでよー！」

「それはひつひの台詞です！」

二人の間でバチバチと火花が散る。

「三人ともまだのようだね」

「お前達はまだ決めていないのか？」

僕らの様子を見に来た宗助と楓さん。

「あ、一人とも決まったの？」

「僕は楓と組む事にしたよ」

「まあ不本意だがな」

「ふーん。でもそのわりには…

【ザシヨーー】

「…今、変なことを考えていいなかつたか？」

「い、いえ、別に

「あぶなつ！？」

いきなり水神ティアマー女帝をのぞ元に突きつけてきやがつたぞ！？

「おまえが変なことを考えているから悪いんだ」

どんな理屈だよ。

「それより早く決めないと選ぶ人が限られてくるよー」

「そうだぞ」

「分かつてるよ」

確かに早くしないとパートナーが見つからないな。
…それにしても。

「伊織はいつも一緒にいるじゃない。」いつも時は私に譲つてよ…」

「ダメです…私にだつた譲れないものはあります…」

あつちはまだやつてるのか。

「はあー仲か良いんだか悪いんだか」

そんな二人を見た宗助は。

「翔つてもてるんだねー」

と勘違いをしていた。

「私もそう思つぞ

同じように勘違いをしている楓さん。

「二人とも節穴だな」

僕がもてるわけ無いだろ。

「それはお前の事だろ」

「だねー」

何故か一人に呆れた顔で見られていた。

第十六話 傍から見れば何とやら（後書き）

あとがき劇場* 僕龍貴姫編

やあ皆さん、元気にしていましたか？伊藤です。

翔「伊藤。今回はかなり遅くなつたな」

「うーん、それには色々と訳が……

翔「へーってどんな訳だよ

夏ばてです。

翔「理由になつとらん」

実は、前回僕がこのあとがきで他の人達の魔道具の説明をするつて
言つてたじやん。

翔「あ、言つてたな」

それで実はこの次の話で、そのかたがたの魔道具が出てくるから
それがあわせて二話同時だしをしようと思つてたんだよねー

翔「それで」

結局間に合わず、時間がこんなにたつてたつて訳だ。

翔「…………シラボ」

「うつー？い、痛い所を…………

翔「それじゃあ今回する予定だった説明は？」

次回つて事で。

翔「ほんとダメな作者ですいません」

まあ、夏休みにもうすこししたら入るから、それまでは待っていてください。ってか、いつもまっている方々本当にすいません。

第十七話 結局「うなるつてオチか

結局、僕は余っていたクラスメイトと組むことになった。

えつ？ あの一人？ ああ、あの一人は……

「私ね、なんかこんなオチになると思つてたんだよね……」

「……うん、私もそう思つ……」

二人とも落ち込みぎみであった。

こうなったのは志穂さんに『喧嘩するならお前ら同士組め……』って言われて二人が組むことになったからだ。まあ仲はいいから大丈夫だと思つし、自業自得？だと思つから同情はしないぞ。

「さてさて、みんなパートナーが決まった事だし、説明をするからよーく聞いておくよう!!」

でかい声で皆に聞こえるように説明し始めた。

「制限時間はなし。パートナーと一緒に相手を倒せばOK!! 以上説明終わり！」

えらく簡単な説明だつたな。

「あ、因みに、相手が降参や戦闘不能。またはそれに準じる状態に陥った場合は『ひひひ』で判断して試合を中断させるから、そこにどこよろしくね~」

重要なところを簡単なノリで話すなよ。

「じゃあまでは……雪村宗助&柳嶋楓ペアーから行ってみよつか」

どうこつたらそんな順番になつたんだ?

「あの先生」

「なんだい? 柳嶋さん」

「普通は名前順とかでは?」

そんな質問に志穂さんはふつふつふと笑いながら

「そこいら辺はノリよ……」

とまあ簡潔に述べてくれた。

この人、本当に人生を謳歌してゐるよな。

「まあ実を言うと、あんた達はこの学年の主席と次席だから、どれくらこの力があるか知りたかったって言つるのが理由かなー」

「えー? 宗助ってそんなに優秀なの! ?」

楓さんはともかく宗助がそつだなんて以外だ。

「まあね~」

「むかつく事だが、私が次席でこいつは主席だぞ」

「世の中ってほんと不思議だね……」

志穂さんの教師の事といい、宗助の主席の事といい……世の中って一体どういった仕組みなんだ？

「そんな些細な疑問は後にして、一人とも準備しなー」

「はーー」

「分かりました」

そう言つて一人はドームの真ん中に行く。

「じゃあ相手は……」

「翔ーー！」

……は？

「なにが？」

「いやだから、あいつらの相手は翔とそのパートナーだ

……え？

「……それってなんの冗談？」

「なわけ無いだろ」

「ですよねー」

「おかしいでしょ！？どう考えたってありえないだろ！？」

「うるさいなー別に私が決めたんぢやないわよ」

「じゅうまいりで済めたんだよ」

あみだくじ

この一回、殴ってもいいですか？

まあほら運かよか二たゞ勝てるにす

なんだよその投げやけな言い方

為るほど、猶才相手だ！」

無論 手力洞にしないぞ」

そこでほしにした

「じゃあ準備が終わりしだいはじめるからなー」

どう考へてもこの戦いは避けられないってことか。

僕、
帰つてもいいかな？

第十七話 結局「うなるつてオチか（後書き）

あとがき劇場・僕龍貴姫編

作者「何故だらう、書いてこいつちに予定と少し違った感じになってしまった」

翔「本当は僕からの戦闘じやないはずだらう

作者「まあ、細かい」とは気にしない

翔「気にするわ。じつは考えたってあの一人に勝てるわけないだろ

作者「どうせ余興だし、かませイヌにでもなつてきな

翔「最悪だーーに最悪な奴がいるーー」

作者「そんな訳で、次回、翔君が頑張つて戦います

翔「それを書くのは伊藤の仕事だがな

作者「はつはつはー出来るだけ頑張るわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6083c/>

僕は龍であなたは姫様？

2010年11月12日22時19分発行